

幼稚園教育実習への効果的な指導・支援についての考察

—本学の授業を通しての学びと課題—

前川 豊子*

はじめに

京都造形芸術大学こども芸術学科では、表現者の力を備えた保育者の育成を目指している。

筆者の担当する講義「教育実習指導」の目的は、教育実習に臨む学生にその実践に必要な知識、保育技術を修得させることであり、関連科目の教員は相互に連携して、実習前・実習中・実習後の指導と支援にあたっている。芸術大学出身の保育者というと、絵や工作を上手くこなせる保育者と捉えられがちである。また、こども芸術学科も芸術と幼児教育両方学べる学科であるとか、幼児の表現（物）を研究する学科だけとか思われがちである。子ども芸術学科の目指すものは、芸術と教育、二つのジャンルの知識・技術を学びつつ、「造形で培った力を具体的に活かして行う幼児教育」の研究である。教育に造形の力をどう活かすか、その方法を教員・学生が一体となって、創造的に試行錯誤しながら、日々追い求めているところである。この過程そのものが目指す教師の姿である。なお、年間授業、諸活動を貫くテーマとして、学生に二つのことを明示している。一つ目は、「子どもの絵は心をのぞく窓」と言われる。幼児の絵を見ることは幼児をみること、幼児の心がのぞけることである。幼児理解を深めるために、幼児の絵を読み取る力を持つこと。二つ目は幼児が心を動かし、取り組みたくなるような環境づくり、活動の工夫、言葉がけを考えられる力を身につけることである。

また、保育の知識および技術と造形制作の両方の課題に取り組むこども芸術学科の学生の多忙な生活に配慮し、教育実習期間を前半(9月の2週間)と後半(11月の2週間)の2回に分けて行っている。そのため教育実習指導の講義は5月にスタートし、12月まで開講することで、学生をサポートしている。

この研究ノートは、そうした年間指導の振り返り、学生へのアンケート調査とその結果、補完授業での対応、教育実習における学生の学びと課題について考察することを目的としている。

1. 「教育実習指導」の展開とその内容

教育実習指導の内容は次のように構成されている。

(1) 学内での幼稚園教育実習指導に加え、筆者が担当する科目

教育実習にむけて (1 回生)		教育実習にむけて (2 回生)	
前期	保育内容 (言葉) <ul style="list-style-type: none"> ・各年齢の言葉の発達の特徴 ・絵本を読み聞かせ・素話 ・手遊び ・言葉遊び ・絵本ノート作成 	前期	造形表現Ⅲ <p>絵本作り (個人制作)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本・海外の絵本 ・絵本の文章表現 ・製本の方法・製本 ・プレゼンテーション ・絵本のテーマ・題材探し (幼稚園ボランティア活動の中で) ・絵本作家、イラストレータによる特別授業を受ける ・絵本の読み聞かせの指導案作成 <p>造形活動 (グループワーク)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導案作成 ・教材研究と制作 ・導入、展開 <p>半日幼稚園実習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループワークを実践 ・反省、考察
	保育内容 (表現) <ul style="list-style-type: none"> ・幼児画の特徴 ・幼児画の見方 ・年齢に合わせた造形活動の指導案作成の手順 (3.4.5 歳児) ・自然物・紙などの素材表現のねらいと表現方法を理解 ・模擬保育 <p>幼稚園見学、観察・参加実習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペープサート制作 ・園児の前でペープサートの準備活動及び実演 ・記録の書き方 ・振り返り 		前期・後期 <p>教育実習指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園実習の意義と目的 ・実習の心得 ・幼稚園の一日、保育者の役割 ・実習簿の書き方、 ・指導案作成 ・実習先オリエンテーションの仕方と注意事項
後期	幼児理解 <ul style="list-style-type: none"> ・乳幼児の発達理解 ・幼児理解と援助 ・幼児と遊び ・幼児と保育環境 ・配慮が必要な幼児への理解 ・実習事例から考察 ・保護者支援 	後期	補完授業 <ul style="list-style-type: none"> ・部分・責任実習に向けた教材研究 ・指導案作成 (個人指導) ・導入・展開の仕方 ・前半の教育実習の反省と課題 ・後半実習に向けてのオリエンテーション

(2) 実習準備⁽¹⁾

実習準備は次のように展開されている。

①名札作り

モチベーションを上げるために、名札作りを行った。名札は幼児に名前を覚えてもらい、幼児と仲良くなるためのきっかけになる。芸術を学んでいる学生だからこそそのデザインや素材選びの工夫で、幼児に夢を与えるような名札を完成させた。(資料1)

②絵本作り

造形の授業と連携して、実習までに学生が手作りの絵本を作成した。幼稚園半日体験をおこなった M 幼稚園でみつけた絵本のお話をもとに創作した。話が決まると、絵を描き製本する。その工程はかなり難しいもので、学生たちは苦戦していた。担当教員は時間外も学生に丁寧に指導を行い、学生は実習で幼児に読み聞かせることを楽しみに、最後まで音を上げることなく完成させた。初めての絵本製作であるため、納得いくものが出来なかったのか、「もう一度やり直したい」。出来上がった絵本に感動してか、「もう 1 冊作りたい」という声が聞こえた。実習に挑戦するという自覚が高まってきていると感じられた。(資料2)

(3) 補完授業について

「教育実習指導」15 コマの講義時間では、教育実習の準備や指導案作成の為の時間が足りない。授業時間内では、書き方の説明までで精一杯である。アンケートの結果にも示されるように、指導案作成に不安を感じる学生が多い。教育実習を行なう学生自身に問題点を認識してもらい、その問題や力不足のところへの取り組みを促すため補完授業を行った。

学びたいこと(参加者 23 名)		日時
指導案作成	23 名	8 月 1、2、3、6、8 日(3~6 限)
導入、展開の仕方	7 名	10 月 18、19、23、29 日(3~6 限)
ピアノの弾き歌い	2 名	11 月 1、2 日(3~6 限)

学生一人一人に指導案の添削指導を行った。後半 11 月の実習では責任実習が入ってくる。学生の作成した活動計画をもとに、教員も加わってシミュレーションを行った。そのなかで、学生は導入、展開、環境構成、準備物、援助への考えを深め、次第にしっかりした指導案を作成できるようになった。

また、後半の実習では、園の担当教員から急に保育の一部を任されることもある。それに不安を感じる学生には、保育の技術(手遊び・絵本の読みきかせ・鬼ごっこやゲームのバリエーション等)を修得させた。このように、当講義の指導内容は、講義、実習のための指導、学生のサポートと多岐にわたる。15 コマでは学生の学びの時間が足りない。今後のカリキュラム計画が課題であると考える。

2. 幼稚園半日体験と本実習

本実習に先立ち7月に幼稚園半日体験をおこなっている。

(1) 半日幼稚園体験 (M 幼稚園) :平成 30 年 7 月 10 日 午前 9 時～ 12 時半 参加学生 26 名

少子化、核家族化、社会生活の変化に伴い、幼児教育に関心を持ち保育者を目指す学生であっても、幼児と触れ合う機会は少ない。幼児理解を深めるため、本学では4年前より近隣の公立 M 幼稚園にご協力いただいて、教育実習の前の7月に半日幼稚園体験を行っている。そこで学ぶ学生たちは、幼児の遊ぶ姿を直接見たり遊んだりする観察実習、保育の一部を任せてもらう部分実習を体験する。大学で学んだ幼児の知識や保育実技などを具体的実践におろす初めての場である。この実習体験に向けて、授業で名札作りや指導案作成をした。活動内容、ねらい、環境構成、教師の援助などを学生達で考え、グループに分かれて導入、展開、まとめ、を考え、全体で話し合い、指導案を完成させて半日体験に臨んだ。(資料3)

【学生の感想】

- 卒園して以来の幼稚園でとても緊張した。どんな風に溶け込めばいいか頭でばかり考えていたが、子ども達はすぐに近寄ってきてくれて、名札に興味を持ってくれた。一緒に手を動かしたり、話したり、笑ったりして、自然体で子どもたちと接する大切さを学んだ。
- 砂場でさら砂を作っている子どもに「何しているの」と声をかけたがあまり話してくれなかった。私も同じことをして、「どうすれば上手にできるの」と聞くと、「それはね、こうするんだよ」教えてくれた。子どもは相手の行動をよく見ているんだと思った。「すごいね」「上手だね」の言葉がけしかできなかつたので、子どもの創造性を伸ばす言葉がけができるようになりたいと思った。
- 毎日授業で幼児について学んでいたが、実際に幼児と接してみて知らないことがたくさんあると気づき勉強になった。
- 子どもと接することは、どんな動きをしたら良いか、どんな言葉をかけたらいいか、何を考えているのか、など大変難しいことを実感できた。

体験後の感想文には、実際に幼児と触れ合っただけで感じた思いを書いているものが多かった。半日の体験ではあるが、熱心な取り組み準備の活動から生まれてきたエネルギーが、幼児としっかり向き合う姿勢を高めていったのではないかと考える。

(2) 本実習の展開

学生にとっての集大成となる幼稚園教育実習は次のように展開されている。

26名が前半(9月の2週間)と後半(11月の2週間)、合計4週間の教育実習を行う。園側

も秋は大きな行事を抱えており、教員は大変忙しい毎日である。そんななか、後進指導の為に時間を作っていただき感謝している。また実習中も、当講義担当の筆者は実習園の訪問を重ね、実習園の指導教員や園の責任者の方と話し合い、実習における学生の学び具合の把握に努める。学生に会い、励まし、直面している問題があれば援助し、解決に当たるなどのサポートを行う。実習中に学生から電話やメールが入ることも多いが、これにも適切で迅速な対応を行った。

学生は、その日の指導案を前もって見せてもらって研究する間もなく、現場に立ち保育に加わることも多い。また、保育の流れの中で、多忙な指導教員に代わって急な指導を任され、指導案を作成しなければならないという厳しい状況におかれることもよくある。これらの問題は、幼・小・中・高・大のどの教育機関においても、雑用やクラブ活動指導、保護者対応、様々な教育支援、研修会、研究会等々の業務で、多忙を極めていているという教員の現状から引き起こされているのである。個々の受け入れ幼稚園だけの問題に帰すことはできないと思う。

平成 29 年度の新幼稚園教育要領では、はじめて「見方・考え方」という言葉が使われた。「見方・考え方」とは「こうした環境を通して行う教育において、幼児が全身の諸感覚を通して、ものや人などを自分の生活や遊びに取り込んでいく過程での幼児なりの感じ方、気付き方、関わり方などです。」また、「環境を通して行う幼児教育において、教員は幼児が主体的に活動を展開し、「見方、考え方」を豊かで確かなもののできるかどうかは、教師の環境の構成、つまり教材の質を高める教材研究にかかっています。」と無藤隆は『幼児期の終わりまでに育てほしい 10 の姿』の中で述べている。幼稚園では、積み木や絵本、砂場などのほか、風・木・光などの自然とのふれあい、これらすべてが教材となる。実習生は、本学の授業で様々な素材の特徴や表現の仕方を学んでいる。幼児が身近な素材を使って「やってみたくなる」ような活動や環境づくりに力を入れて指導した。指人形の制作をしている際、1 回生の一人の学生が、背景づくりにガムテープを利用して木を制作した。立体感が出てとても良いアイデアだと思い、そのアイデアを 2 回生にも共有させ、責任実習の活動にもっていけないか一緒に考えた。今年度の責任実習例を二つあげたい。

実践例の一つとして、A 幼稚園において緑の葉を台風で飛ばされ悲しく寂しい思いをしている木を、学生がガムテープで表現し、3 歳児の園児にミノムシを作らせて張り付けてもらうという試みをした。たくさんのミノムシたちが住んで楽しくにぎやかになり、木を喜ばせるというストーリー性のある活動を行った。

もう一つの事例は、学生が模造紙の上で新聞紙と絵具を使って力強く幹や枝を手書きしたものがあある。学生の制作した幹や枝を見た 5 歳児は「先生、すごい」「わぁ、上手だね」と驚き、製作意欲がわいて、夢中になって次々と色とりどりの葉、虫、動物たちを描いたり張り付けたりした。^(資料 4)担当教員からも教材研究を褒められ、責任実習を満足に終えた一学生に対する反応である。本学の学生はとくに教材研究に力を入れている。その学びを現場で活かせることは、大きな自信につながったと考える。

(3) アンケート調査

教育実習などに関するアンケートをおこなった。

アンケートI

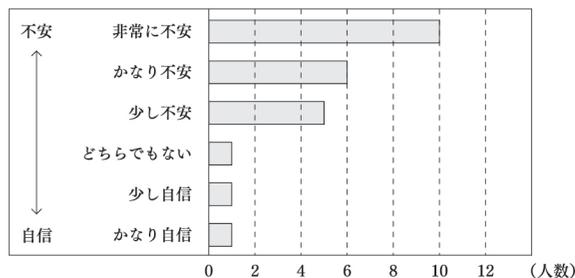
前半実習に行く前に、不安と答えた学生は8割を超えていた。主な不安要因は、初めての実習である事からくるものと、指導案を作成しなければならないことで、その課題を解決出来るかどうかと心配していると思われる。指導案作成に関しては、補完授業で個々に丁寧に関わった。不十分ではあるが書き方を理解し、自分一人で書けるようになると笑顔も出てきた。その他の不安に関しては、学生の話をしっかり聞いて対応していった。話すことで気分が落ち着く学生もいた。

「前半2週間の実習で苦勞したこと」は、予想した通り指導案づくりであった。担当教員の指導案を見せていただけなかった学生は、自分ですべてを把握して書かなければならない。実習期間中にも電話・メールを受け付けているが、最も相談が多かったのは指導案作成に関することである。授業や補完授業で何度も練習を重ねたが、実習現場で目の前の幼児の実情に合わせて作成することが大切である。あらかじめ指導案を作成して実習に臨んでいるが、目の前の幼児の興味・関心と合わない、発達段階や経験値によって指導案を変更しなければならない。担当教員に指導を仰ぐことになるが、もう一度考え直す学生もいて、かなり苦勞した後が伺える。

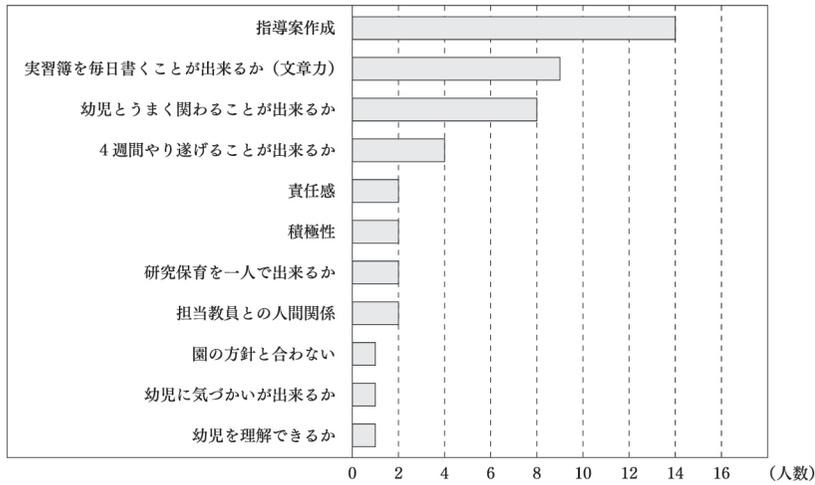
後半の実習まで1か月あるので、学生と共に園の実情を把握し、幼児理解に努めた。また、実習簿を見ながら、書き方の指導を行った。後半は責任実習を控えているので、季節の配慮や教材研究も深めていった。

アンケートI

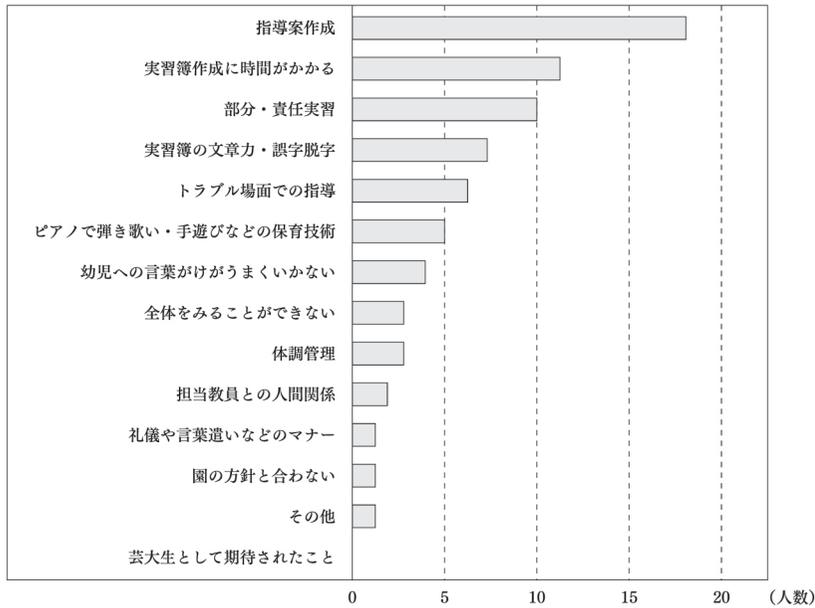
問1. 実習に行く前の気持ちを教えてください



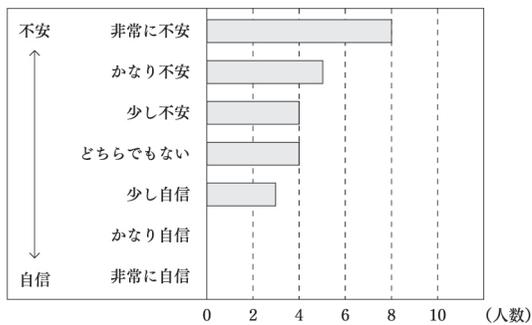
不安な理由（自由記述・複数回答可）



問2. 前半2週間の教育実習の中で苦労したことを3つ選んで○をつけてください



問3. 前半実習を終え、準備をして後半の実習へ行く前の気持ちを教えてください



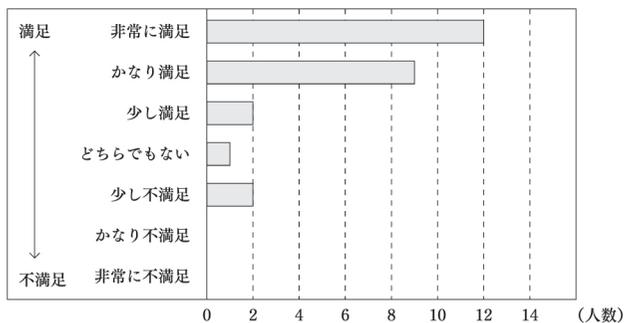
アンケートⅡ

11月の「後半実習に行く前の気持ち」で「不安」と答えた学生は減り、少し自信があると応答した学生が5名になった。前半実習で幼児とふれあい「先生」と呼ばれ頼りにされたこと、自分で制作した絵本が幼児に喜ばれたこと、部分実習がうまくいったこと等が自信につながった。前半実習後の10月の補完授業では、「こんなことがやりたい」「この活動のねらいはこれでもいいか」など、後半実習に向けた指導案づくりに向けてのねらい、導入、教材選びを自ら考え出し、相談してくる学生が多かった。これは課題に対して真剣に向き合い、目標とすることをやり遂げた者だけが得られる充実感と、自分を信じる力が湧き出ている証であると思う。後半実習への取り組みへの変化が現れた。

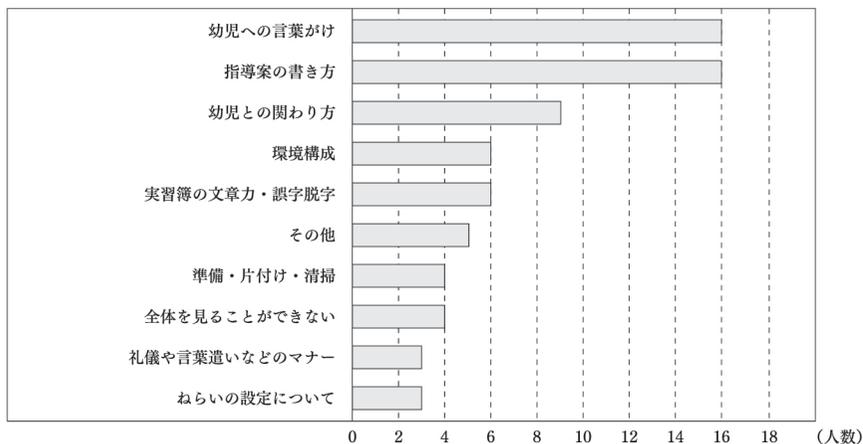
9月と11月合計4週間の「実習終了後の気持ち」への答は、7割近くの学生が「満足している」であった。「幼児の世界が素晴らしかった」「担当教員の人間性や専門性に触れて憧れや感動の気持ちを持った」「製本した絵本が幼児に喜んでもらえた」「制作物を教員や幼児たちから褒められた」何よりも「先生と呼ばれ幼児に頼りにされた」ことが自己効力感を高めている。

アンケートⅡ

問1. 教育実習を終えた気持ちを教えてください

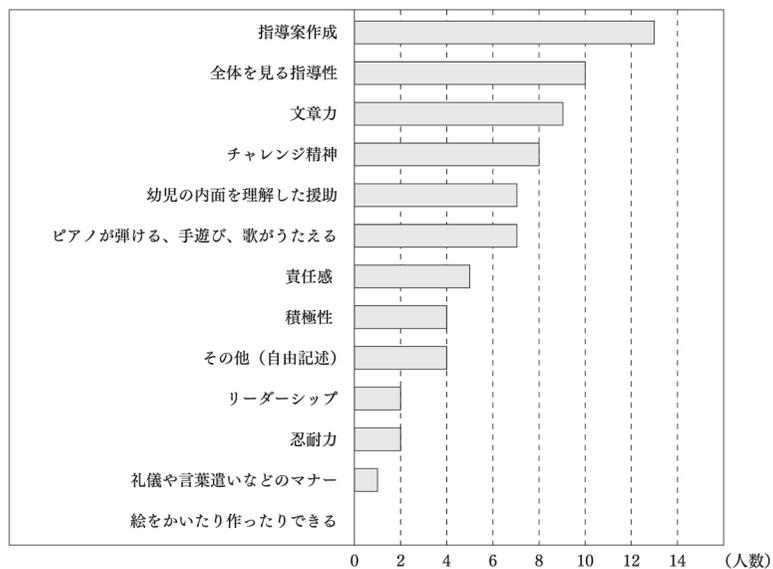


問2. 教育実習期間中に担当教員や園長先生から指導を受けた内容について



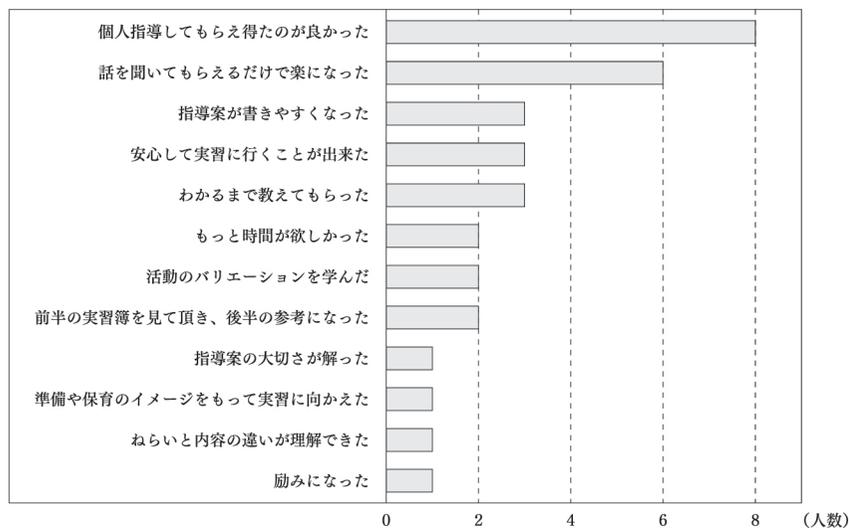
その他 自己管理 /2 ピアノの弾き方 /1 最後までやり遂げる事 /1 積極性 /1

問3. 実習終了後、最も課題として残ることはどのようなことですか

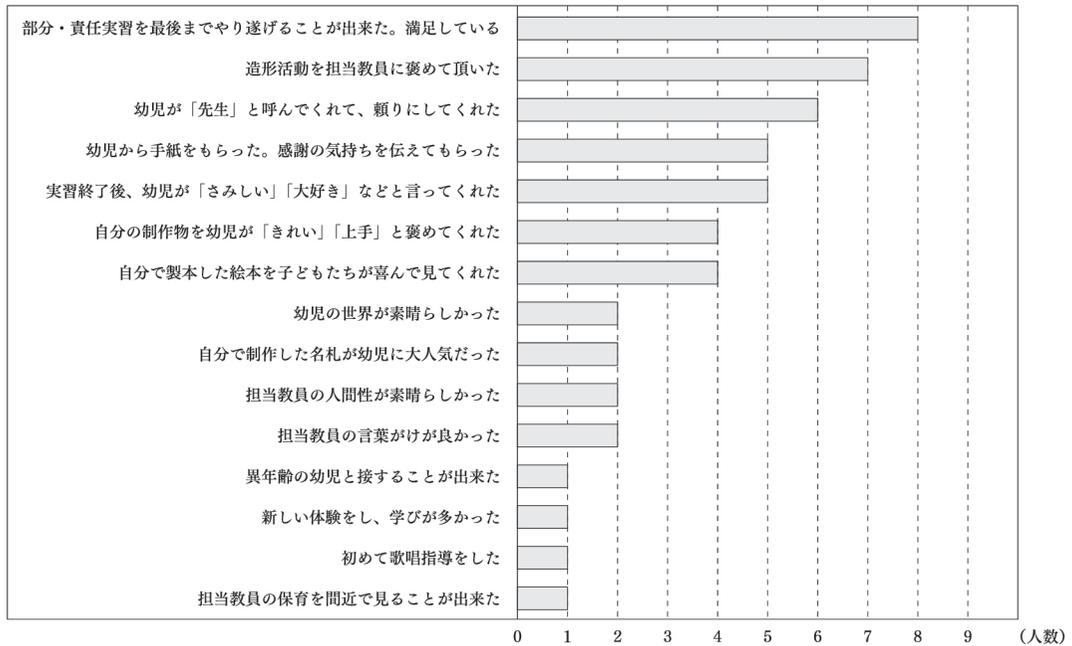


その他 自己管理 /2 支援を要する子供への援助 /1 エピソード記録 /1

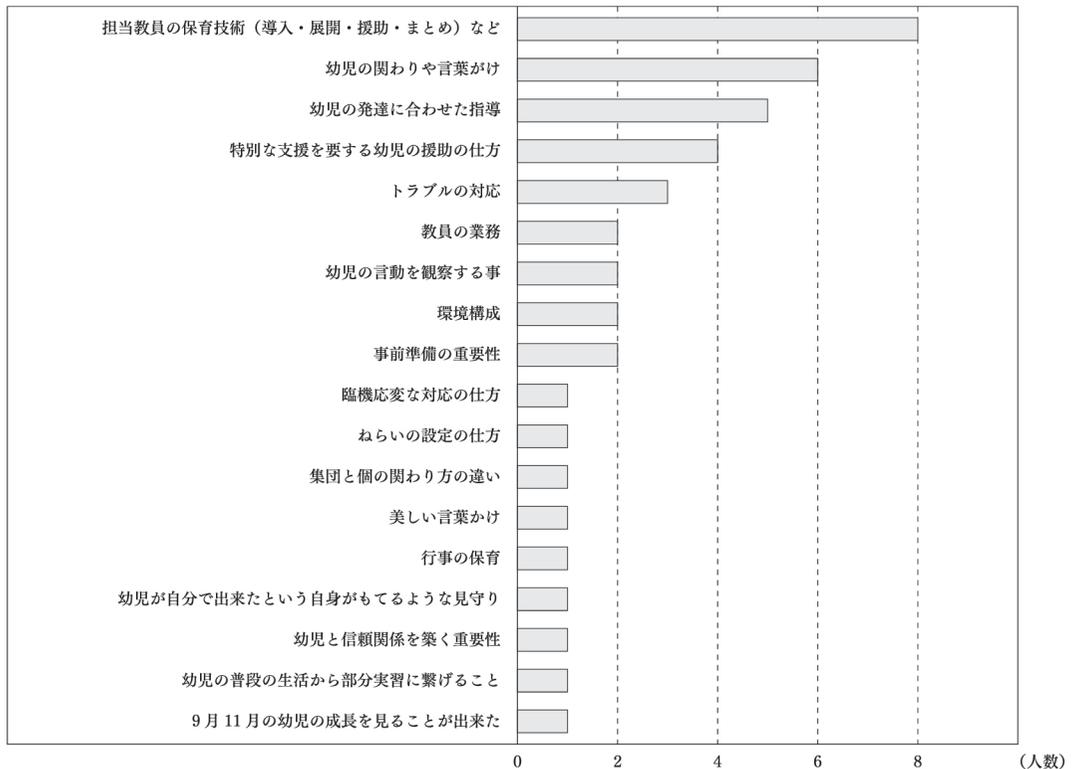
問4. 補完授業を受けてどうでしたか (自由記述・複数回答可)



問 5. 今回の実習で嬉しかったことを書いてください (自由記述・複数回答可)



問 6. 今回の実習で非常に勉強になったことを書いてください (自由記述・複数回答可)



【実習を終えての学生の感想】

- 誰もが困難に直面する授業だったし大変だった。特に指導案作成は現場に行ってみて必要であることが良くわかった。指導案の書き方はもっと前からたくさん学んでおけば良かった。
- 特別な支援を要する幼児の理解とその関わり方や言葉がけの仕方について、担当教員やカウンセラーと話し合いの場に入れてもらい、勉強できたことが嬉しかった。
- 担当教員が本当に素晴らしかった。その先生に出会えたことが一番嬉しかった。
- 自分が制作・製本した絵本を読み聞かせしたら、真剣な瞳でじっと見てくれた。その顔は忘れられないし、とても嬉しかった。
- いつもふざけたりたいたいたりしてくる幼児が、部分実習のあとに私の描いた絵を見て、小さな声で「きれいだった」と言ってくれた。
- 実習中は行事が多く、その中で研究保育をし、子ども達の言動を観察する大切さを学んだ。また保育者の仕事（保育の準備、保育、環境構成、指導案、会議、保護者と連絡、実習生の指導など）も知り、幼稚園の先生になりたいと思った。

おわりに

1回生から指導している学生が2回生となり、今、幼稚園教育実習を終えたところである。制作課題の取り組みや幼児教育の勉強、教育実習の準備、実践とがむしゃらに取り組んだ2年間であった。入学時ちょっと頼りなげで幼さを残していた顔がずいぶん変わってきた様に思える。課題が人を作る。そんな言葉が浮かぶ。不安と戦い、挫折を経験しながらも教育実習という大きな山を越えた学生達である。

私は本学の幼稚園教育実習に関わって4年になろうとしている。こども芸術学科や学生の特性を考え、この講義の指導のあり方や方向性が明確になったと考える。それは「丁寧で具体的な指導をすることの重要性」である。

最近の若者の傾向として、柔軟で優しい人柄であるが、自己肯定感の低さから、自信がなく受け身的な生活をしている学生が多い。丁寧な指導で実践を援助する中で、学生に次第に笑顔が見られるようになり、目を輝かせ自信を持ち積極的な考え方、発言、行動になっていく姿が多く見られた。システムとしてこの教育体制を保持できれば、学生の潜在的能力を開花させていくことが出来ると考える。

さらに、学生が日常的に幼児と触れ合うことは出来ないだろうか、学生には保育ボランティアや保育のアルバイトを勧めているが、チャンスに恵まれなければ、その機会を得ることは難しいだろう。例えば系列園の幼稚園での活動を常態化するなど、触れ合いのシステムを作れないだろうか。

実習を終えた学生の顔はやり切ったという充実感に輝いて見える。同時に実践の中で感じたであろう幼児理解の不十分さ、学識の浅さ、社会常識の欠如等を痛感しているかもしれない。一歩踏

み出したからこそ生じる迷いや湧いてくる疑問もあるだろう。これこそ実習後の学びの原動力となる。実習中の失敗や成功を整理分析し、できた部分や自分に足りないところを知る。教員はそれを実習後の学びに生かす指導が必要である。幼児理解を深める学びや造形の実践的な指導を取り入れた授業をしていきたいと考える。

この研究で見えてきた今後追求するテーマとしては、

- 学生が幼児の表現活動を計画する上で、幼児の何を育てたいのか。そのためにどんな活動をさせて、どんな言葉がけをするのかを考えさせる。学生自身がねらいを明確にして、実習準備することが必要である。
 - 日頃の授業の中で語彙を増やすために、絵本を読ませて絵本ノートを作らせ、その中の素敵な言葉を書き出すことを勧めているが、この指導を一層確かなものにする。
 - 幼児の絵や製作物を理解するために、幼稚園児の絵画・製作展に行き、実際に幼児の絵や製作物に触れる機会を増やすよう指導する。
- いずれも、今後の研究課題としたい。

注

- (1) 資料 1～6 について、受講生の作品および写真は本人の了解を得て掲載している。

文献

- 小田 豊『教育・保育実習と実習指導』（光星館、2012 年）
小林 隆 / 森田真樹『教育実習・学校体験活動』（ミネルヴァ書房、2018 年）
無藤 隆『幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿』（東洋館出版社、2018 年）30 頁
文部科学省『幼稚園教育要領解説』（フレーベル館、2018 年）

資料1 羊毛フェルト・ひもなどを使って作成した学生の名札



資料2 授業内で製本した絵本の読み聞かせをしている学生



資料2 学生の手作り製本



資料3 半日体験の様子



活動の導入を行う学生



石膏遊びの説明をする学生



「魔法の粉をかけると絵が出てくるよ」



園児の前で「プレーメンの音楽隊」を実演



「どんぐりの冒険」を実演

資料 4



学生がガムテープで作成した木
3歳児がミノムシを製作する



学生が新聞と絵具で作成した木
5歳児が葉・虫・動物を描く

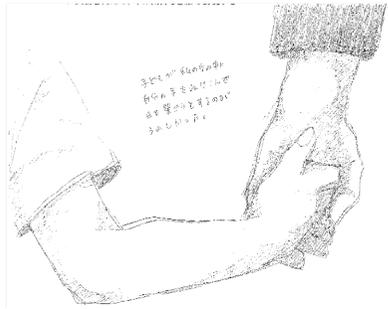
資料 6 実習の総括を学生が絵で表現したもの



A 学生



C 学生



B 学生

子どもが私の手の中に自分の手をねじこんで手を繋ごうとするのが嬉しかった